

発達障害児の SST と養育不安の変化

白百合女子大学 五十嵐一枝

【発達障害児の理解】

発達障害は広い概念である。ここでは、高機能広汎性発達障害（以下 HFPDD）、注意欠陥/多動性障害（以下 AD/HD）、学習障害（以下 LD）などのいわゆる軽度発達障害（以下発達障害）に関して言及する。これらの発達障害の本質的な問題はそれぞれ異なる。HFPDD では、社会的相互性や言語コミュニケーションの障害と行動の偏りや想像性の欠如などが特徴的問題としてあげられる。AD/HD では、行動抑制困難と注意の集中・持続の困難が主たる問題である。また LD では、文章が読めない、文字や文が書けない、計算ができない、などの学習における特異な困難が見られる。このように、障害の本質的特徴は異なっているものの、これらの障害が「発達障害」というひとつのまとまりの中で支援が検討されてきたことにはそれなりの理由がある。

発達障害は、脳機能に由来すると考えられる認知発達の遅れや偏りや歪みによって生ずる。認知の問題は各発達障害によって異なる部分と共通する部分とがあるが、多くの発達障害児が、認知発達のアンバランスによる一次的または二次的な集団適応上の問題、すなわち社会適応上の問題を持っている。例えば、子ども達はしばしば、他者の表情や身振りや声の調子などの手掛かりに気付かず、周囲に気配りや目配りができず、場にふさわしい言葉の使用ができない。あるいは、冗談や比喩を理解せず、ひとりよがりであり、先を見通した行動ができない。また、どのように行動したらよいかを分かっているのに、場にふさわしい行動をとることができない。このような社会的能力の問題は、それが本質的であるか二次的であるかによらず、幼稚園・保育園・学校、あるいは家庭や地域社会において、本人自身はもちろん、周囲の人々にも戸惑いやトラブルを生じさせがちである。しかも知的遅れがないことにより能力のアンバランスや生活上の困難が周囲から理解されにくく、本人自身も高い能力を持っているにも関わらず自分の困難さの本質がわかっていないため悩みも深いという点で共通している。

【子どもの特徴と親の養育不安】

発達障害児の特徴と、親が子育ての過程で抱く不安について、表 1 と表 2 に示す。発達障害児では、乳幼児期および幼児期早期の親への愛着の示し方や、親との相互性の形成や、他者理解などが、通常の乳幼児とは異なっていることが多い。親を認識せず、後追いをしない、手のかからない、しかし応答の少ない乳児であったり、夜泣きや寝ぐずりが多く育てにくい乳児であったりする。一人歩きができるようになると同時に、駆け出しなどの危険な行動やこだわりなどの迷惑行動が頻繁になる。言葉の発達が遅れることもある。ようやく言語を獲得しても、理解や表出にずれがあり、親からみて宇宙人のような理解困難児であるといわれたりする。この時期は、子どもの特徴の理解、特に子どもの障害特徴の理解が必要になる。表 2 のごとく、発達障害児の親の養育不安は子どもの年齢によってさまざまである。臨床経験を通して感じることは、発達の問題

から目をそらさず、問題に対する具体的支援法を考えて実施し、そして子どもの発達的变化を親と共に確認することが、発達障害児の親の養育不安の軽減に最も有効であるということである。子どもの障害特徴に適した療育や治療的教育が効果を上げて、子どもが発達的变化をとげることが、親の不安を軽くし、将来の発達の可能性を見出し、子育てに希望と意欲を持つことにつながる。(表3)


表1

子どもの特徴
■ 育てにくい、または手のかからない乳児
■ 目が離せない幼児期
■ 理解困難な言動が目立つ児童期以降
■ 通常の育児方法がうまくいかない

表2

親の不安
■ 障害の理解
■ 育て方、教育機関
■ 集団適応、友人・教師関係
■ きょうだい、親子、親戚、近隣関係
■ 就学
■ 将来、仕事
■ その他

表 3

 <h2>子どもへの実際的支援</h2> <ul style="list-style-type: none">■ 問題の明確化(発達的問題の特徴)■ 子どもに対する具体的支援方法の提示■ 療育、治療的教育の実践
--

【発達障害児の SST】

低年齢の発達障害児は、集団の中で問題を呈してはいるものの、自分の特徴が親や周囲を混乱させ悩ませているという自覚はない。しかし、発達と共に周囲との違いを意識しだし、自分の特徴に関する葛藤や悩みが深くなると言われる。子ども達の集団適応上の問題は決して小さくないし、放置できないことである。低年齢であっても、問題を改善していくための対応を検討することが必要である。子どもが自分の特徴を自覚していなくても、集団の中での自分の行動を他者からフィードバックされることにより、発達段階に応じた自覚に至ることが出来る。

実生活の中で見られる問題に注目し、子ども達が自分の行動や認知の特徴を自覚するように促し、問題解決の方略を積極的に提示し、解決スキルの発見と獲得を助けることが、私達の SST のねらいである。SST は、対象児の問題や人数により個別指導と集団指導が考えられ、内容的には障害の本質的問題である一次的問題への対応と、障害を持っていることから派生した二次的問題への対応、および問題発生の予防的対応とがある。私達の研究グループは、発達障害児のソーシャル・コミュニケーションの困難に着目し、小集団における臨床的アプローチ（ソーシャル・コミュニケーション・プロジェクト：SCP）を試みてきた。

(1) ソーシャル・コミュニケーション・プロジェクト（SCP）とは

従来から、SST は様々な目的を持って多領域で適用されてきており、定義も種々認められ、対象となる行動や年齢も多様である。SCP は、私と研究スタッフが 2001 年から始めた発達障害児（AD/HD、LD、HFPDD 児）の社会的相互性の発達を目的とした SST に始まる。SCP は、発達障害児の社会的な認知とコミュニケーションの発達に焦点を置いた心理・教育的なアプローチであり、

次のように特徴づけられる。SCP は、①参加、②協力、③コミュニケーション、④適切な援助、を重視した指導プログラムを組み、遊びや制作や発表などを含む構造化された場面において、仲間と指導者との実際のやり取りを行うなかで、自己と他者の認知やコミュニケーションの特徴を理解し、社会的相互作用に必要なソーシャル・コミュニケーション・スキルの発達を促すプログラムである。ここで言うソーシャル・コミュニケーション・スキルとは、自己と他者の双方にとって有益な方法で社会的に相互作用する能力であり、社会的相互作用の発達段階において不可欠な機能で、構造化された小集団における認知的アプローチによって発達が促進されるスキルを指している。

SCP は表 4 のような特徴を持つ。SCP グループの構成や、目標設定、プログラム内容の検討などに先立って、医学診断と事前の心理学的アセスメントを行う。心理学的アセスメントには、ウェクスラー法他の知能検査や各種認知能力検査、社会生活能力検査、行動観察、保護者面接を含む。各対象児について、認知発達のどの段階で問題があるか、あるいはどのような認知発達の特徴があるかを明らかにしたうえで、年齢や性別も考慮してグループを構成し、集団と個人の目標を設定する。原則として 1 年間はグループメンバーを変更しないで行う。同一メンバーでグループを継続することの意義として、メンバー相互の親近感と信頼感が育ちやすいこと、プログラムへの反応やチェックリスト等により長期的変化を確認できることがあげられる。

(2) SCP のプログラム

SCP のプログラム例を表 5 に示す。プログラムは、①始まりの挨拶、②出席確認、③今日の課題説明、④ウォーミングアップ課題（ゲーム、制作など）、⑤主課題（発表など HFPDD の特徴に特化した課題）、⑥次回の説明、⑦終わりの挨拶、の 7 場面から構成される。このプログラムの構成は、年齢や性別やグループや期間によって変更がないが、④と⑤の課題内容は、グループの認知発達のレベルや特徴、獲得目標を考慮して計画する。⑤では発表、作文リレー、話し合いなど対象児の社会的状況の理解やコミュニケーションの特徴を前提に考案された課題が行われ、④ではゲームや制作などにおいて各々の社会的実践力が発揮される。

これらのプログラムの内容は、個人が注目される場面（始まりと終わりの挨拶、出席確認、発表や話し合い）、競争する場面（ゲーム、話し合い）、協力する場面（ゲーム、制作、作文リレー、話し合い）、説明を聞く場面（今日と次回の説明、ゲームや制作や主課題の内容説明）、を含んでいる。発達障害児は、日常生活の中で好奇のまなざしで注目されたり、あるいは逆に無視されたり、不適切な競争や妥協をしたり、言われたことを勘違いしたりすることが多い。注目をプラスに生かせるように、適度の競争や挑戦が出来るように、グループのメンバーとして仲間と力や物の貸し借りが出来るように、言われたことのポイントを理解できるように、そしてこれらのことを出来るだけ楽しく実践できるように配慮してプログラムが作成される。

表 4

SCPの特徴	
■ 特徴1	4～5人からなる小グループを構成し、児同士の相互作用に着目した指導を展開。児の発達段階に合わせた指導者の介入を行う。
■ 特徴2	発達臨床心理学を専門とする指導者によって計画・統制された各場面のなかで仲間との関係性を重視しながら、児らの社会的行動の自覚を促すことに焦点を置く。

表 5

SCPプログラム

X年5月18日のプログラムより

1	はじまりのあいさつ 着席し、一斉にあいさつする	2分	ウォーミングアップ課題 グループによって、制作プログラム・ゲームプログラムが交互に行われる。実践の場。
2	出席 係りの人は全員の名前を読み上げ、皆はそれに応える	3分	
3	今日の説明 話を聞き、理解する	5分	
4	制作<あじさい・かたつむり作り> 個人で見本を見て解読し、折り紙を折る	20分	発達障害児の特性を考慮したプログラム。グループによって作文リレー・話し合いなどに変更。
5	発表<僕の好きな本> 自分の考えを発表する。他の人はしっかり聞く	20分	
6	次回の説明・シール貼り 話を聞き、理解する	7分	
7	終わりのあいさつ 着席し、一斉にあいさつする	3分	

【SCP の効果と親の養育不安の変化】

構造化された集団場面におけるメンバーやスタッフの言動を自分自身の行動に関連付けて、自らの特徴を知って発達的に変化していく過程が SCP の効果である。これまでの経過を踏まえて、次の4点の発達的な変化をあげることが出来る。すなわち、①メンバー間の種々の感情に気づく、②他者の立場から考える、③状況に適した言動を考える、④自分の特徴についての肯定的な気づきを得る、である。SCP の長期的実施は、構造化場面における社会的スキルの獲得のみではなく、

発達障害児の認識や言語コミュニケーションのあり方に発達的变化をもたらし、子ども達の生活の質を変えることができる（表6）。

この様な子どもの発達的变化は、親の養育不安を大きく変える。親は、通常の育児書には記載がないようなわが子の行動やコミュニケーションなどの発達上の問題について、理解の仕方や対応のポイントとなる視点があることを理解する。他のきょうだい達とは少し異なる視点から、認識や感じ方の特徴を受け止めて子どもに返していくと、その子どもは親にとっては思いがけないような変化を見せる力があることに気づく。AD/HD、LD、HFPDD といった発達障害児は、宇宙人のように理解不能な存在ではなく、立つ位置を少しずらして観点を変えれば、子どもの困難についての相互理解が可能であり、適切な支援によって子どもは発達する。この理解が、親が子どもの発達障害を肯定的に受け入れ、親の関わりの意味を見出して養育を行うことにつながる（表7）。

表6

SCPの効果

スキルの獲得に終わらない



発達障害児の認識の仕方、言語コミュニケーションのあり方の変化



子どもの生活の質の変化

表7

子どもの発達と親の変化

子どもの物の見方、コミュニケーションの変化



親の驚き、子どもが変化できることの認識



親の関与の自覚

「子どもは安全の基地を必要としている」

白百合女子大学児童文化学科 繁多 進

子どもは自分ひとりの力で生きていくことはできません。ですから「この人といれば自分の生命は大丈夫だ」「この人はいざというときは必ず助けてくれる人だ」と思える人を子どもは必要としています。子どもの「安全の基地」になるのはこのように「人」なのです。子どもの最初の安全の基地になる人は、多くの場合、両親です。とりわけ母親がその有力候補です。

赤ちゃんは生後6ヶ月頃になると、母親と他の人々を区別して、母親に対して特別の行動を示すようになります。母親の姿が見えなくなると泣き叫び、誰が慰めても泣き止まないのに、母親が帰ってきて抱き上げるとびたりと泣き止むというような行動を示すようになります。このような行動が生じるのはこの赤ちゃんが「この人が自分の生命を守ってくれる人だから、いつもこの人と一緒にいたい」という気持ちをもったからにほかなりません。このような特定の対象に対する特別の感情は「愛着」と呼ばれています。この赤ちゃんは母親を最初の愛着の対象にしたのです。

養育者（生母でなくても）が赤ちゃんのさまざまなシグナルを読み取り、それにある程度応答する人であるならば、赤ちゃんたちはその養育者を愛着の対象として、「この人に守られている」という安心感をもって、つまり、愛着の対象を「安全の基地」にしなが、自らの好奇心の赴くままに伸び伸びと探索活動に勤しむようになります。

しかしながら、すべての赤ちゃんがこのような健全な愛着の対象をもてるとは限りません。養育者に対して「この人は本当にいざというときに自分を守ってくれるのだろうか。そうではないかもしれない」と疑いの念を抱いたり、「この人に期待するのは無理かもしれない。あきらめたほうがよいのかもしれない」と感じたりする赤ちゃんたちもいます。このような子どもたちは「安全の基地」をもてないわけですから、不安と闘いながら毎日生きていかなければなりません。

このように乳幼児期に健全な愛着の対象をもてなかった子どもは、成長しても養育者に対して「彼らは私の要求に応じてくれず、感受性に乏しく、信頼できない」という気持ちを抱き続けるばかりでなく、自分自身についても「私は悪い人間で、望まれていず、価値がなく、愛されない人間」という自己像を作り上げ、そして「世界は安全でなく、人生は生きる価値がない」という信念をもつことになるでしょう。近年、大きな事件を起こしてきた青年たちがこのような信念を抱いていたであろうことは疑う余地のないことだと思います。

親が子どもの健全な愛着の対象になるためには、親子間に暖かく、継続的な相互作用の積み重ねが必要だとされています。子どものそのときどきの情緒を読み取り、なぞりながら応答する親に対して、子どもは「この人には自分の気持ちが伝わる」という気持ちを抱き、信頼の感情を高めていくのでしょう。多くの親はごく自然にこのような相互作用をしているのですが、残念ながら、子どもとの暖かい接触ができないばかりか、子どもを虐待するような親もいます。

このような親に育てられた子どもが健全な愛着の対象をもつことができず、安全の基地をもつことができず、上記のような信念をもつことになりがちなことはすでに述べてきた通りです。このような子どもに支援の手を差し伸べなければならないことはいうまでもありません。保育園や幼稚園に通っている子どもなら、まず、保育者がその子どもの愛着の対象になるよう懸命の努力をしなければなりません。「この人は自分の気持ちをわかってくれる」「この人は自分を守ってくれる人だ」と思われるようにならなければなりません。保育園や幼稚園に行っていない子どもであれば、近隣や親戚の人々がその役割を取らなければなりません。

支援すべきは子どもだけではありません。子どもの健全な愛着の対象になりえない親も支援の対象です。まずは保育者も近隣の人々もそのような親にあたたかい目を向けることです。虐待したり、適切な養育ができない親にあたたかい目を向けることは難しいことではありますが、そのような親こそがまわりの「あたたかい目」を必要としているのです。苦しんでいる親子を冷たい目で突き放すのではなく、暖かく包み込むような社会であればと願っています。